

花桐

室生犀星

青空文庫

女が年上であるということが、女を悲しがらせ遠慮がちにならせる。時にはどういう男の無理も通させるようにするものである。花桐が年上であるだけに持彦もちひこは一層打ちこみ方が夢中であつたし、女に対するあらゆる若い慾望のまとも、花桐にあつた。甘えて見たり無理無体をいつて見たり、ときには啼すすり泣きの声を聞くまで理由のないことで責めたりする、それは愛情が痒かゆいところの手のとどかないような気のするときとか、愛情の過剰がそういう現われに變つたりするのである。花桐はそういう持彦のくせをよく知っていた。そのときの感情のあらわれで気持をはかつては見ているものの、持彦が年上の自分にたいしては母であつたり姉で

あつたりするさまぎまのものを、どう避けようもなく、また、それが当然母のいない持彦のもとめるものであることも、しだいに分つていた。だが、しじゅう、ほとんど付き切りでいることや、少しの休みもなく愛情のあらわれに渴きかわを見ることには、花桐も自分の気持のあらわしようなないことを知つたのである。あまりに執拗しつような愛情というものは女の愛情をついに封じこめてしまうものであつた。つまり、どうすべいう術も施しようもなくなつてしまふのである。

みやつかさ
宮司

の女の房に入りびたしにいる持彦には、はじめは他の女たちも避けて見ぬふうをよそおうていたが、きようも控えのいちぐう隅に、用もなく花桐の下がりを待つ持彦の姿を見ては、またか

という気持がしだいに嶮けわしくなつて行つた。若い持彦にはそんな他の女の心にどう自分が映うつらうが、構うひまもないふうだつた。つまり一刻のあいだにも花桐を失うている時間というものは、持彦には存在してはならぬものだつたのだ。

花桐は殿中から下がつて来る長い渡わた殿どのの歩みのあいだに、胸がみだれてくることを感じ、歩みも、せかせかと悲しく不意に躓つまづきさえしていた。あんなにされては困るが、困つても持彦が来なくなるということは、一層困るし生きられぬものに思われた。厭いやで厭でならぬものと、好きでそのため身を滅ぼしても構わないもののが、入り乱れて、彼女に心を整理させるひまも与えないのである。きようこそ思いきつて房に待たぬようにいい、中三日くら

い置きに逢^あうように言わねばならぬと、殿中から下がりながら決心していても、持彦の顔を見るときもう言えなくなり、乱れてしとどになつていた。そんなひまさえないくらい、引つきりなしに持彦の愛情にあおられていなければならぬのだ。彼女は美しく窈^{やう}れさえして、その窈れのえもいわれぬところに、持彦自身もやつれを深くして行つたのだ。そして二人のいるあいだに、いかに、時というものが速やかに経つてゆくかに驚くほどであつた。日はすぐ暮れる。すこし話したりまた話が途絶えたりしているひまに、時間というものはまるで駈けてはすぎる、ひととき一刻やふたとき二刻のちがいではない、高い日はあつても、それはすぐ秋のようにすげなく落ちた。かれらは、いつも暮れきつた夕方に二人の白い顔をうか

べ、驚いて日のくれたことを身におぼえるのである。かれらには、全くおちついて話をするような時間にすらも、見放されたようなものであった。

さめざめとして花桐は或る夕方、持彦にしだれていった。

「あなた様のようにそんなに事こと繁しげくお通いでは、もはや、わたくしも勤めようもございませぬ。殿中のおごそかな有難いつとめの手前もありますのに、そしてよそ人の眼づかいのただ中にでも、あなた様は気のふれた方のように少しもあたりをお構いにならずに、日がな夜がなお待ちうけになることだけは、何とかしておつ謹んしみくださらないでしょうか、もはや他の房の方がたは、わたくしが通りますると指さして、耳打ちをなされ、わたくしは面おも伏ふせ

ととおることには慣れてまいりましたものの、殿方すらも何彼なにがとお噂うわさなされはじめました。あなた様が思いこめてくださることは身をくだいても足りぬ嬉うれしきではありませんが、それにも引きかえ、もう、勤めも一日ずつ辛くなりましては、身の破滅に近づいているとおなじでございます。このままであなた様も恙つつがなくお勤めが成就できるとお思いでしょうか、あなた様のお考えも承つておかねばなりません。

持彦自身もこう事繁く通うては、諸々の勤めもとうてい完まう出と来ないこと、何とか足を抜き人目を避けなければならぬと考え、きよう一日だけ通い、明日は控えようという心に誓つても、その明日が来れば、またきよう一日くらいはいいだろうと、もはや、

自分をせぎ止めることすら出来なかつた。或るときはうつらうつらと通い、或る日はわき目もふらずに通つて房の戸のそとに立つていた。きようは止そう、きようこそ通うことは止そうと、いまのいままで考えていながら身はすでに房の内に、花桐の衣裳の筐はこのかけに坐つていた。辛辣な花桐の朋輩ほうばいらも、しまいに持彦も官を免ぜられて浪々の身となつてしまふであらう、そして花桐も殿中の勤めを辞めなければならぬようになる、しかも持彦の人もなげな逢あいびき引は夜に限らず、ま昼にすら男を引きよせているではないか、主殿寮とのもりようの人びとも見るに見兼ねて、持彦にそれとなく忠言しても、そんな事に耳も籍かさぬ若者の勢いは、奥のわたどのに沓くつ投げ入れてその夜も宿直とのいのように体裁つくろうては、も

う、何の尽すすべもなかつた。かれらのこういう噂を耳にしては持彦も凝じつとしていられなかつたが、夜がくれば花桐の顔がかがやくように匂い、宿直していても一人寝の枕にしたしめなかつた。彼女も一人寝していることを渡わた殿どののあなたに思いえがいては、とうてい殿中近くにすだくあまたの虫のこえを聞いて、夜をおくすることは出来なかつた。そして翌朝帰つて来ると、きのう自分で投げ入れた沓くつをはき、何くわぬ顔付で出仕して行つたが、それも行き詰つて自分で自分を何とか片づけなければ、どうにも、殿でんち中ゆうびと人の眼と耳とを蔽おほうことができなかつた。もはや官を退くより方法はないが、そうならそれでもつと逢いもつと物語つたあとでも、おそくはないという半ばは稟うまれつき身の悲しみを越えた気

持は、ただ、いやがうえに逢いたさの迫るばかりであった。

「お身にあうごとにお身の額にきざまれるものを見て、はつとするが、しかし自分で一人いることはこれまでの経験でも、とうてい耐えられるものではない、そして何時の間にか花桐のそばに来てしまうのだ、そのたびにお身の心労は額に深くきざまれてゆくように、あうごとに気が気ではない、きようこそは一人で寝ようとしても、夜は静かであるしお身の寝息がわたどののあたりで聞える、髪もおうて来る、お身の話す言葉がながい列になって頭にかんで来る、そうになると一人でいることが莫迦莫迦ばかばかしくなり、今宵一夜のためにはどういいう生涯が間違つて出来上つても、そんなことは、どうでもよくなつて終うのだ。まして有象無象うざうむざうのかけ

ぐちなぞが、生涯をたたきつけて賭けている人間にとって、何の益がありさまたげがあろう、お逢いして目もくらやみ、心もつかれはてた境に早々に行きつきたいだけでござる。すべてはお身の胸にあつてそしてわたくしの胸にもある。何もいわずに今宵だけをおくるためにお身はいられないのか、お身のくるしみは分る、そのあとに何がくるかも分る、お身は里方にわたくしに黙つて下がつて行きはすまいか、お身のみちはその外にはない、お身はそれをとうに覚悟をしているのだ、お身はまだ羞かしいはすことを知つているし、その羞かしいものの償いつぐなを世の人におくる善良さを持つて、それを挨拶あいさつとして殿中と別れようとしていられる、しかしわたくしは羞はすかしさをつぐなうことも出来ず、また、それをし

ようとも考えていない、わたくしには何も彼もうしろに退けてしまつた、あるものはお身だけだ。殿中では唯一人わたくしの友というもの、同僚というものがいなくなつた、けぶたげな顔付でみな横向きになつてわたくしを遣り過して置いて、かげぐちを叩く、それが何でしょう。お身にあうことができれば流罪だつてわたくしは敢て辞する者ではない。」

「けれども持彦様、わたくしが此処を去れば、あなた様はほかの姫たちをおえらびになることができましように、わたくしごときにその生涯をお投げうちになることは、よくよくお考えあそばせ。」

「お身が去ればお身の落ちつきさきに行くだけだ、お身の里の蝙蝠

うもり
蝠はわが面をかすめてささやいて過ぐるであろう、そしてお身もわたくしも草の匂いのするところで、一夜じゅう虫の音を聞いてゐることになるだろう。」

「まあ里方までお越しのおつもりでございますか。」

「里方にまいつては何故わるいことになるのです。」

「里方には父も母もみないられます。父の眼をのがれることは出来ませぬ。わたくしは里方に下がりますればもはやお目にかからぬつもりにありまする。」

花桐はきつぱりといった。

「お身はひとりでいられるがいい、しかしわたくしはお身を一人で置かぬ。」

「いいえ、一人を守りつづけるつもりでございます。」

花桐は心にもないことを言うことで、一層混乱した悲しいものに邂逅かいこうした。それは毎時いっつも彼女の胸をとおり過ぎる不可思議な或るいじらしい反抗であつた。

「お身が逢つてくれなければ一晩じゆう、お身の屋敷のまわりをうろ付く。」

「あなた様はそのようなことをなされて、恥かしいとお思ひになりませぬか。」

花桐は一切を放棄した持彦が、きつと、夜じゆう、彼女の名を呼びつづけることに疑いをもたなかつた。

「眼中に何物も見えてはいないのだ、見えるものはお身のきらき

ら光っている瞳があるだけだ。」

「このような瞳がいつたい何になるのでしょうか。」

「お身はお身のひとみを見たことがあるまい、お身の瞳を見つけて来た人間には、しばらくでも、その瞳からはなれていることが出来ないのだ。お身の瞳はもうわたくしの眼の中にはいつている。」

さすがの花桐も、またも持彦の言葉のなかにしだれ込まれなければならぬ、是非もないものが感じられた。どうにでも、こういう境をさばく聡明があつたら、それに裁いてもらいたかつたが、彼女にはそういう聡明らしいものすら、遠くに去つてゐることを知つただけであつた。

「持彦さま、どうぞご存分にあそばせ、わたくしはあなた様の前では、心をまもることも拒こばまれているとしか思われませぬ。」

「どんなにあがいても我々は二人の間からいずれも退けることが出来ないようになってきているのだ。」

彼女は熟つくづく々持彦の顔を見ながら、半ば恍こうこつ惚とした半ばは感銘ただならぬふうに、呆あきれたようにいった。

「男というものにほだされると、こんなになるものとは思いませんだ。こんなにも、女の生涯までも持つてゆくものだとは、まるでぞんじませんでした。」

彼女はさめざめと持彦にもたれて啼すすり泣いた。それは愛情が極まったくやさしさもあれば、もう何処どこにも行かない、あなた様のお

傍そばよりほかに行くところがないという証あかしでもあつた。そして女と

いう運命がみなこんなものであつたかという発見も伴うていた。

「お身は時々自分にかえつて二人の間を考えているが、わたくしはそれを考えるひまもなかつた。無理無体だとは知つていたが、もう自分を制おさえるちからも、なくなつてしまつたのだ。ありのままで我々の生活を続けるより外はない、迷うということは我々にはもうなくなつているのだ。」

「わたくしは迷うことの愉たのしきをおぼえています。あなた様のかにわたくしのみちは、迷いつづけているような気がいたします。抜けみちも、出るところも見失つているのでございますもの。」

「それはわたくしからも言える。お身がわたくしに抜けみちがな

いといふより、もつと、みちは紆^{うきよく}曲^まじていてまるで行き先さえ分らない、これはわたくしだけではなく、誰でも女の中に生きるみちを見付けた人間は、みな此^{ここ}処^こが行き止りになっていることを知るようになるのだ。もどるにも、戻るみちはふさがれている、先へすすむだけしかない、すすめば進んだだけの元きた道はふさがれてしまうのです。おそらくそこで大抵の人間はみな命を落してしまふのだ。一度はいれば、命までなくなるみちなのだ、これを知ると知らざるとにかかわらず、たしかに命をおとすことだけはたしかだ。お身の命はわたくしの中に、わたくしはお身のからだの中に恐らく愉しそうにお互の命をまもりながら生きているのではないか。」

持彦はやつとうまく言い当てるところに行き着いて、自分の言ったことに間違いのないことを感じた。同時にそれは花桐の考えているものと一致していた。

「そこまでまいりますと、怖いこわような気がいたします。」

「凝じじと見つめていると恋愛より恐ろしいものはない、これは処刑であると同時にあらゆる人間のくるしみがそこで試されているよ
うなものだ。そとで見ているような生優かすかすしいものではない。ここ
におよそ苦痛とか快樂とかの種数かすかすをかぞえて見たら、ないもの
は一つもないくらいだ。」

花桐と持彦はかくて人目も恥かたじけなくじずに、逢いつづけた。これは余
りにも大胆だと思つても、花桐は引きずられるままに引き摺ずられ

て行くより外に、つくしようもなかった。

花桐の里方の母がみやこに上つて来て、花桐を説き伏せ、尋じんじ常ようでは改めさせる事ができないので、或る日形容できないような一人の奇怪な男を連れて来た。異様な眼光をもった背中のかがかんだこの男は、花桐を見ると、石上に坐らせて、父母のかわりだというて決して反抗してはならぬといった。

「あなたは以後男とおあいになるかどうかを判はつきり然ぜんと言つてもらいたい。」

しかし花桐は半ばわらいながらいった。

「あなたは一たい誰方どなたでございます。」

「母上殿から頼まれた陰陽師だ、あなたおんみょうじのなかにある男を封じ
るためです。」

そばに彼らと連れ立った二人の神巫かんなぎは、もう、花桐のそばに
くると、指を反らせ、呪文のようなものを称となえはじめた。陰陽師
は再び花桐にこれから後にも、男と逢あひびき引するかどうかを尋ねた。
「お逢あひびきいたしますとすれば、いかが、なされます。」

「先ずその男を不具者にする、眼とか、手足とかに、まじないを
かけて利かなくするのだ。つまりその男は官に勤めていれば、も
はやその官職を免ぜられてしまう、そしてその男は自然に女をも
顧みなくなるのだ、我々の呪文や祈きとう祷によつて女が女であるもの
の凡すべてが封ぜられるのだ。」

「そんな無体な祈祷がこの世にあるものとは思われませぬ、もしあつたとしても、わたくしの身心がそれに委ねられるとは思ひませぬ。」

「それは我々の数限りない経験から一つとして功をおさめざるはなかつたのだ、或る者は秋の夕を推して町の遠くを乞食こじきのように歩いていたし、或る者は永く片一方の手だけしかはたらけなかつた。凡ては罰せられ罪せられざるはなかつたのだ、あなたも反そむけばそうなるのだ。」

「わたくしはまだ神の罰せられた不幸な人間をこの眼で見たことがございませぬ。神に罰せられた人間がないのを見ても、あなた方がいつも作りごとをなされていられることが分るのです。」

「作りごととは何だ。こういう我々の額から何がながれているかとくと、見なさるがいい。」

実際、陰陽師の額からは冷たい汗がだらだら、気味わるくながれていた。しかし、花桐の答えは不敵な、彼らの胸をつんざくものがあった。

「あなた様は先刻その清水でそつと額をぬらして、いらつしやいました。おかしなことをなさると思つていますと、ただいまのような嘘うそをおつしやいます。あなた様は嘘ばかり仰おおせになります。」

陰陽師はあかく耳までほてらせた。かれがこれほどに衝つき込まれていわれたことが、殆ほとんどためしがなかった。

「額の汗はここから他の人間を説くときにほとぼしる汗なのだ、
いよいよ、我々の説くことにお従いにならないなら、あなたも男
も、二度と見られない悲しい不具者になることを覚悟されるがよ
い。」

花桐は笑つてもう対手あいてにならなかつた。こういう神巫や陰陽師
のまじないの子供くさいことを信じる母も母なら、石の上おに坐つ
てしばらくでも、かれらの思わくの中にはいった自分が可笑おかしく
てならなかつた。彼女は立ち上ると、神巫と陰陽師にむかつて、
かつとした大声をあげて呼んだ。

「用事はございませんでしたら、どうかおかえり下さいまし。」
「母上様の仰せおおによつて我々はまかり越したのだ。かえれとは何

事です。」

「母上はお考えちがいにあらせられたのでしよう、どうぞおかえりを——」

彼女はそういうと、彼らの傍そばをはなれた。こういう人事を尽すということも花桐には愚昧ぐまいの極みに思われた。もしこういう陰陽師や神巫によつて女の心をほぐすことが出来るようだったら、人間の愛情というものがこの世に存在しないであろう。

同じ日の同じ時刻に、上の官人かんにんの発企ほつきによつて持彦は加茂の川原に連れ出されていた。そして彼は秋おそいみそぎの水を浴びなければならぬように、四囲の事情が迫っていた。それは、みそぎをすることによつて神々に誓う女禁の界に立つことだった。

「一旦、それを誓えばこれを破ることが出来ない、破れば彼の運命が逆転して死を招くか、不具者になるかの境であった。しかし、持彦は悠然として水をあび、そしてみそぎの行いを済したのである。それを見澄した上の官人は小気味宜げに嗤つていった。「そちはこれで二度と女にあえなくなるだろう、そちが逢おうとしても、女の方で逃げ出すか避けるかするであろう。」

持彦は笑った。

「これしきのことと心のかわるような女は、やつがれ知り申さぬ。」

「神の式をこれしきのこととは、嚙けも程にされい。」

「水につかることが厳かな御式なら、やつがれ毎日這入り申そう

。

「

「もしこたび女を呼ぼうようなことがあれば、そちは免官になり女も倉住居くらずまいをせねばならぬのだ、神をおそれぬそちは、間もなく神の名で足なえか、眼しいになつて悔くをのこすだろうに。」

「足なえ結構、眼しいも結構、存分に神罰というものがどんなものだから、受けて見たいものだ。」

「性懲りしょうこのない輩やからよ、早く此処ここを去るがよい。」

「そして今宵も彼女におあい中して、もろもろの神の式を嗤わらおう。」

上の官人は怒つて彼を打とうとしたが、別の一人はその手をささえた。そして持彦は悠然と加茂の土手をつたい、おそ秋の日ざ

しをあびながら、人間の心にあるものを神の形式によつてあらためることの莫迦^ば莫迦^ばしさを笑つて行つた。

花桐はきよう陰陽師と神巫の祈祷によつて、試されたことを告げ、そしてそれらは凡^{すべ}て嘘の式であり形であるといった。どのようにしてもあなた様のお傍^{そば}をはなれることが出来ないのに、上の官人もするに事欠いて人を試すことの可笑^{おか}しさを述べた。

持彦も強いられたみそぎが、何のためにもならないことを笑つた。人は形式をつくりすぎる、そんな形式や神式の何物かが、人の生活をあらためさせた例^{ためし}があるうか、人はその人自身によつて何事もあらためるものを更^{あらた}めてこそいいが、式や形でそれを司^{つかさど}ることは無理であるといった。とりわけ、お身とわたくしのこと

は、心とからだに我々は反くそむことが出来ないといった。

「しかし花桐、もう、我々も辿り来てみると、どうやら、行き止まりに出ているらしいではないか、きよう、みそぎをしながら深くそれを感じた。」

こういう持彦はいつにない、あらたまつた言葉づかいであつた。「わたくしも既もう行くところがなく、里下がり命じられそうな気がいたします。わたくしたちは我わがまま儘な思うままの二人を世間に見せびらかしていたようなものでございますもの。」

「流罪でも何でもはや辞する者ではない、もう覚悟は出来ているのだ。」

持彦は冷然として或る末路を迎えるような、しかも、それには

恐れぬ気持を見せていった。

間もなく花桐は里下がりを命ぜられ、殿中を退いて草深い里に去った。同時に、持彦も官を免ぜられ京を去らねばならなかった。花桐の里方では、彼女を倉の中に閉じ込め、謹しみと罪科とによつて庭にも遣しやうよう遥ようできぬようにした。倉の中の一室は秋深くうすら寒くすらあつて、来る日も彼女は一つの窓から外を眺めた。持彦との愛情の行衛ゆくえはこうなるより外に、なりようがなかった。それにしても、倉にこもつてから持彦という一人の男が、どれだけ深く花桐の体内にはいりこんでいたかが、しだいに彼女に男と**いうものがこうも恋しいものであるかに、胸をいためた。或る日**

の彼女は男の言葉をつぎからつぎへと思い出して、それを頭の中でつづりあわせて見ていた。どの言葉にもうそはなく、そしてそれはいつも、ぎりぎりのところで口火を切っていた。或る言葉は言葉ではなくて一つの行為でもあり苛責かしゃくでもあった。美しいつねるような苛責だった。さらに彼女は男というものの肉体の不思議さを思いえがいた。その不思議さは彼女にとって行くほど複雑な、さまざまの心理と行為の奇蹟きせきのようなものであった。たとえば男というものの腕だけの世界でも、それがちよつとでも、女からだにさわると、かつて知ることのできなかつた頼母たのもしい信頼しきつた腕力が感じられ、それにもたれていることだけで、何もいらぬような一切を放棄した信条が花桐の心に湧わいた。「ああ

いう立派な殿中の勤めさえ捨てさせた男というものは、全く女にとつては何も彼もいらぬように仕向けて来るものだ。女にとつて男というものは神仏なぞとくらべられない、惹きつけるちからを持つているものだ。」と、彼女は感じた。かつて持彦の放埒ほうらつに慄おびえた彼女は、もう慄えることがなくなっていた。何と男とあつている間じゆう、花桐はふしぎな顫ふるえをかんじていたことだろう、指がちよつとさわつても顫え、話をしているだけでも顫えた彼女に、それらの総ての慄おのきがなくなつたいまは、その顫えが心の奥ふかくはいりこんで、肉体のなかでこまかく顫えているのだ、そしてその顫えはしだいに持彦の名を呼びつづけているようなものだ。しかも、彼に逢つて物語ることによつて、彼女のふしぎな

顫えはとまり、落ちつけるのであった。何という変りはてた自分であつたらう。

この窓で見る夕方から夜のあかりは、庭のうえでは、いつも、ぼやけた美しい毎夜の落月であつた。花桐はその遠くの道のはてに一人の男のすがたを見付け、それが持彦であることを疑わなかつた。かの女は薄葉うすようをこまかく裂いてそれを継ぎ合せ、窓わくに下げて風の過ぎるのを待った。風は紙きれの尾を吹いて宙に舞わせ、遠くからでも、その動きの見えるようにはかつた。第一夜第二夜はすぎ、そして第三夜にはとくに大きい紙片を折からのほげしい風になびかせた。花桐はその紙きれにみちびかれて来る人のかげを、道の近くに見付けた。

かげを持つ人は間もなく花桐の屋敷の土の塀を乗り越え、かが 踏むようにして樹木のあいだをくぐつて来た。花桐は紙きれをたたんで、ひとすじの帯を窓からさげると、その端をしっか 確りと倉の柱に結び付けた。それは彼女の手ではどうてい男一人を支えきれないためであつた。

持彦は倉の下に近づくと、その帯のはしをつかんでいった。

「花桐どの、誰か見ておらぬか、気をつけられい。」

「唯ただいま今はもう就寝にございますゆえ、誰もしとみ部しとみのそばには出てはおられませぬ。いまのうちに早く。」

「登り申すぞ。」

「心置きなく気をつけて?」

持彦にとっては帯につかまり、足を板わくに置いてのぼることは、何の苦にもならなかつた。半ば登りかけたときに、持彦が沓くつをわすれたことを花桐は知つた。夜まわりが廻つて来ると、すぐ沓がわかる位置におかれてあつたからだ。

「持彦さま、お沓を……」

「これは慮りよがい外であつた。」

持彦はふたたび下りると、沓を帯に結びつけた。それを上からするするとたぐり上げた。持彦は一瞬のうちに倉の階上におしあがつた。

「暗うございますが眼がなれてまいりますと、何も彼も針かも見えないように相成ります。」

「悲しい目にあわせ申した。我らも流罪の監視でよう出られ申さぬ。しかし、それが何のさまたげがござろう。も、そつと近くに。」

「はい。」

「ようようお身の顔が見え申して来た。夜が明けかかるようにしだいにはつきりしてまいる。」

この薄ぐらい倉の中では、花桐の顔の白さだけがあかるい明りだった。その顔明りはふしぎにあたりの机の上にも、上敷にも、そして窓の外の薄月のひかりさえ誘いいれているようなものだった。

「たとえばお身の顔が右にうごけば右の方が明るくなる、左にう

「ごけば階段の方が見えてくるではござらぬか、人の顔に明りのあることを初めて知り申した。」

「あなた様のお顔にも明りがあつて、よくあたりが見えるようになりました。燭あかりはつけてもいいのでございますけれど、わたくしはあなた様のお越しの日を見越して、わざと燭ははぶいておりました。いつも、くらく致しておけば父も母もたずねてまいることがございませぬゆえ。」

「お身は寒くはないか、こよいも顫ふるえておられるではないか。」
「怖こわいやら嬉うれしいやらで手も足もふるえております。持彦さま、しかと手をおにぎり置きくだされませ。」

「これでよろしきや。」

「はい、間もなく顫えが止りましょう、ご覧ろうじませ、ほら、だいぶしずまってまいりました。」

「ふしぎでござる。」

「ほら、もはや何事も無いように顫えが止って来ました。」

「うむ。」

「これは心がえがく妙な絵のようなものでございます、一つらなりの顫えが或るときは鶴のつばさをえがくように、まんまるく大きく顫え、そして次の顫えがちいさく、足や尾をえがいてゆくように思われます。それを凝じっと感かんじていると、ときには、わだつみの波のようにもおぼえられます。」

「お身はいつも和歌のように何事も感かんじている。なるほど、もは

や倉の中は暗くなくなり申した。」

階段も棚も、おびただしい荷物の筐^{はこ}までが、はつきり分るようになって来た。

「わたくし此^{ここ}処でほんの小さいかげろうの姿までが、見えるようになれてまいりました。燭のない方が何も彼^かも美しく匂うように見えてまいります。」

「しかもこの暗さはしたしい暗さだ。手ですぐえるような藍^{あいだま}玉のつらなりを見るような気がする。」

「窓の方から見ませ、山も、野も見えます。そして地上ではどういふ小さい物でも、少しでも動いているもので見分けられないものともありません。」

「山野にも眠りがあるような気がするではないか、夜の葉が眠っているなら、それらの夜の葉をあつめた山にも、ひとときの眠りがあるわけだ。」

「山は人の眼に見えなくなつたときに、そういう眠りを眠つていることが言えるのでしよう。」

彼らの物語は尽きなかつた。そして彼らの生きていることも、尽きるものではない、その夜から持彦は再びかよい続けた。燭をともさない倉の中に、何の話声も漏れ^もず、外部からは人の気はいすら感じられなかつた。毎夜のような薄い月夜が倉にある二つの窓にさしながら、そこらのものを、さらに朦朧^{もうろう}とけぶるように見せていた。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 下」作品社

1982（昭和57）年6月

初出：「PHP」

1947（昭和22）年4月創刊号

※表題は底本では、「花桐《はなぎり》」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2015年7月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花桐

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>